解説

海舟日記　第八冊

資料番号942017　04

法量　縦一九・〇cm×横一二・八cm　全一〇〇丁（墨付一〇〇丁）

東京都江戸東京博物館都市歴史研究室では、平成十三年（二〇〇一）以降、史料叢書『勝海舟関係資料』の編纂を進めてきた。同十四年からは「海舟日記」の編集に入り、今年度は明治二年三月二十一日から同三年十月二十三日までを収める「海舟日記」第八冊を対象としている。

当館編集の「海舟日記」が従来の『勝海舟全集』所収のものと最も大きく異なる点は、日記中に登場する人物を選別することなく、網羅的に調査し、簡潔ながらも注記を施したことにあるだろう。もとより、調査の行き届かなかった点も多々あり、不十分なものでもあるが、作業の過程で今まで明らかにされなかった明治期の海舟の姿も少なからず浮き彫りになったことも事実である。

ここでは、「海舟日記」第八冊の書誌的情報と共に、明治二・三年の海舟が如何なる立場にあったのか、静岡藩や維新政府との関係はもとより、今まで殆ど取り上げられてこなかった諸藩士との交流に注目しながら、概観・紹介することで、解説に代えたい。

1書誌的情報

本冊は、「金花堂」銘の黒罫紙を料紙とし、茶色の表紙を付けて袋綴じされている。表紙には海舟の自筆で「従明治二己巳四月廿一日至同三庚午十月廿三日」と記されるが、実際は前冊第七冊から続いた明治二年三月二十一日から翌三年十月二十三日迄の記事を収める（口絵写真1参照）。

本冊にも、前冊と同様、朱色の紙片が貼り付けられた箇所がある。例えば、明治二年分は、四月二・四・六・八・十四・十八日、五月十四・二十・二十七日など四十三箇所、同三年分は正月元・二・三・十八・二十六日、四月六・十五日、五月十三日、六月三・四日の十箇所である（以下、日記の引用は4／2、年号を入れる場合は2／4／2のように記す）。これは明治十年代に太政官正院の下の修史館で編纂された「海舟日記抄」（以下、単に日記抄と略す）に対応するものである。該当部分には◇を付して明示した。ただ、日記抄に収載されながらも、紙片が見られない五箇所（2／5／21・22・24・25、11／23）もある。紙片が剥がれたものか。

注意したいのは、日記抄記載文と本冊のそれとに若干の異同が見られることである。例えば、本冊明治二年四月十八日条に「御家ニ而は益御勤真の報国尽忠」とある部分が、日記抄では「御家ニ而は益御勤慎真実の報国尽忠」と、「勤慎」が抹消され「真実」と書き換えられているのである（本冊で「勤真」とある部分が日記抄では「勤慎」と記載される）。また、本冊同条「…神祖江被対す且千年

之後迄も…」が、日記抄では「…神祖江被対す亦且千年之後迄も…」と、「す」が消され、「亦」が挿入されている。しかもこの抹消と挿入（ゴチック体部分）は海舟の自筆であり、修史館が編纂した日記抄に海舟が目を通し、必要に応じて手を入れていることが判明するのである。日記抄を底本にした昭和初年の改造社版『海舟日記』や、改造社版を踏襲した講談社版『勝海舟全集1 幕末日記』と、この当館編集版とに違いが見られるのは、底本の違いによって生じたものと解されたい。

こうした異同はいくつか散見されるが、すべてを紹介しきれないので、以下、異同箇条を列記しておく。

明治二年　5／14・21、7／2・22、8／11・12・13・21、9／10、10／25、11／23

明治三年　1／2、4／15、6／4

2 静岡藩との関係

静岡藩との関係については、【付録2】に載せた静岡藩関係者データによってある程度の傾向をつかむことが可能である。なお、静岡藩は、明治二年六月までは駿河府中藩が正式名称だが、ここでは静岡に統一する。

静岡藩幹事役を勤めた海舟は、付録データによれば浅野氏祐や戸川安愛、服部常純ら藩庁要職にあった面々と繋がりを持っていたことが明らかである。さらに、政府や藩庁との仲介役を果たした公用人・公用掛との接触も目立っている点もその立場を象徴していよう。

ただ、藩当局と頻繁に接触していたとはいえ、双方は決して信頼関係にあったとは言い難く（例えば2／8／9）、自分の意見が藩で採用されないことに嫌気が差した海舟は、しばしば藩から身を引くことを願っている（2／4／21、12／28）。しかし、知藩事徳川家達の引き留めもあって（3／1／3）、明治三年に入っても藩庁の人減らし問題等での指南役を務めていった（3／7／10、10／12）。

無禄の旧幕臣を配下に持っていた勤番組之頭や開墾掛関係者との交流も、静岡藩における海舟の役割を考える上で興味深い。中条景昭や井上清虎ら開墾志願者に対して、海舟は支援を惜しまず（3／9／21）、時に仲裁役をも果たし（2／10／17）、彼らもまた海舟に相談を持ち掛けるなど（3／2／1、4／23）、双方の関係は深かった。勤番組之頭の人選に関して、海舟が相談を受けているのも（3／1／20）、勤番組と浅からぬ繋がりを持っていたことの現れといえ、海舟が静岡藩地方行政に関わっていたことを示している。

その他、勤番組に編入された旧幕臣の増扶持願い（2／7／6・9、8／2～5・8・12・14・21）、徳川慶喜の謹慎解除（2／4／6・18、5／3、7／19～22、9／28、10／26）、日光神領の処分（2／5／3、7／17、10／24・25）等、海舟が関わった諸件も少なくない。

さらに、自らを頼ってきた旧幕臣を救済することに何の躊躇いもなく、恐らく初めて訪れたであろう元歩兵や新選組隊士らへも惜し

むことなく出金し（4／1・2、5／16、8／22、9／2・27、11／28など）、無下に突き放したりしなかった点も見逃せない。なお、沼津兵学校関係者との関わりについては、諸藩士との交流のなかで後述する。

3 維新政府との関係

維新政府との関係については、外務大丞・兵部大丞を拝命したこと（2／7／18、11／23）が本冊での大きな事件であるが、海舟はいずれも辞退し早々に免職されている（2／8／13、3／6／14）。

自分が政府に出仕することは消極的だが、有能な旧幕臣の政府出仕を仲介しているのは、前年以来の海舟の活動のひとつといえる。本冊では杉浦誠（2／7／26、8／2・3）、塩田順庵（2／8／2・4・6）、赤松則良（3／7／30、9／28）らの出仕に関する記事が散見される。

なかでも順庵は、幕末期に海防問題に関心を寄せた元箱館病院の医師で、この時既に還暦を過ぎたベテランだったが、海舟は蝦夷地・外交問題での尽力を期待したものと思われる。若き海舟の後援者渋田利右衛門が、箱館商人であったことも海舟と順庵との接点を推測させよう。ただその政府出仕は実現せず、順庵は明治四年二月、六十七歳の生涯を閉じた。代わって息子の三郎が外務省に出仕し、明治三年に外務大丞鮫島尚信に従いイギリスに派遣され（3／9／16）、翌年には岩倉使節団に随行するなど、父の遺志を継いでいくのである。

また、幕末以来の門下生で、民部省に出仕した佐藤政養については「軍局」こそ適任だと大久保利通に示唆するが（講談社版『勝海舟全集2 書簡と建言』86）、政養は工部省に出仕し、京都・大坂間の鉄道敷設で活躍していった。

人材だけではなく、旧幕府の諸記録類を静岡藩要人から手に入れ、政府に提供していたことも注意すべき点である（2／6／26、9／17・18、10／19）。海舟は旧政権の遺産を政府に引き継ぐ上での潤滑油的な役割を果たし、その意味において、静岡藩・維新政府双方から不可欠な存在と位置づけられていたといえよう。海舟が藩から身を引くことを願いながらも叶わなかったのは、こうした事情によっていると考えられる。

政府出仕に積極的ではなかった海舟でも、政府高官へ自説を披露することは頻繁だった。殊に当時の維新政府の最重要課題であった蝦夷地経営、海軍創設、外交問題、贋金処分等で意見を交換していることなど（2／7／22、8／11・14・16・21・23・24など）、海舟は政府にとって有用な人物であったことが窺われる。それゆえ静岡に帰郷した海舟に対し、早々に東京に帰るようにと、政府からの依頼が相ついだ（2／12／16、3／3／11・15・25、4／6・9、5／13）。

また、朝鮮問題を担当した外務大丞柳原前光へ、関連書類を貸与し意見を述べるなど（2／11／11、3／1／7、6／7、9／21）、

対アジア問題でも少なからず影響力を及ぼしていたのである。

4 諸藩士との関係

（1）藩政改革

明治二・三年の海舟は、静岡藩以上に他藩の藩政改革に関与していた。本冊からは、以前交流をもった米沢、高知、熊本、和歌山などはもとより、あまり付き合いがなかった諸藩士との接触が見出され、注目できる。

米沢藩では宮島誠一郎や甘粕継成、小川源太郎ら（2／7／6・9・24・28、8／27、9／2・16・18など）としばしば交渉し、大参事新保朝綱も、海舟に「国政改革」を相談している（3／9／24）。高知藩では毛利恭助ら（2／7／6・11など）の名前が見られるのは、前冊から引き続いてのことである。熊本藩では、海舟と横井小楠との繋がりからその門下生（実学党）との関係が深く（ただし戊辰戦争期には反実学党の竹添進一郎、古庄嘉門らとも交流した）、この時期、太田黒惟信・安場保和らが訪れ、「国政改革」の内話に及んでいる（3／9／16・22）。

さらに和歌山藩では、青年期の海舟に学資金を援助したと言われる醤油醸造業者の浜口梧陵が、藩の権少参事となり、海舟を訪れ（2／6／22）、「紀藩之官員・職制・俸禄」について相談した（6／28）。権大参事の津田出・同伊達宗興・権少参事山本弘太郎らとの交流も確認され（2／7／9・26、3／9／6など）、海舟が和歌山藩の急進的藩政改革に一定の役割を果たしていたことを推察させるのである。

なお、この時期、東京における海舟の拠点は明治五年の赤坂氷川町移転までは、赤坂和歌山藩邸内の長屋であり、借用に当たって尽力したのが同藩士武内孫介であったことからも（表紙見返し、2／3／29、4／12、10／10）、海舟と同藩とは浅からぬ関係だったといえよう。それゆえ、戊辰戦争期に海舟の配下となって恭順・鎮撫活動を展開し、その後刑法官捕亡方となるも、この頃罷免された信太歌之助の「身分」について、海舟は同藩の津田正臣（出の弟）に相談し（2／7／20、8／2・7）、門下生の杉亨二（沼津兵学校教授）が和歌山に行きたいといえば、武内孫介に働きかけるのである（3／8／20、9／23）。元第二長崎丸乗組員の柴誠一を和歌山藩で雇いたい旨も海舟は聞き及んでいる（3／8／10）。

幕末にはほとんど交渉が見られなかった出雲松江藩と頻繁に接触していることも（2／4／10・11、6／28・30、7／18・23・26、8／1・2・4・17・25など）、この時期の特色のひとつである。海舟を訪れたのは、おもに藩当局の小田均一郎と赤木真澄の両名で、「国許改革之事内談之書付持参」（2／7／29）、「藩内之事談話」（8／4）、「雲藩給禄取調之事相談」（8／7）と、海舟に具体的な改革案を求めている。その後、赤木が給禄改革につき礼を述べ（10／9）、小田も知藩事松平定安からの礼状をもたらすなど（11／1）、同藩改革に海舟が与えた影響は大きかったことを窺わせる。

他には富山・金沢・松山・岩国などの諸藩士の名前が散見される。

そのうちの金沢藩とは、幕末期の海舟と親密で、開成所出版物の刊行に関わった万屋兵四郎こと福田敬業（鳴鶯）が、維新後同藩に出仕し、公用人を勤めていたことが大きかったに違いない。

なお、本冊からは、佐久間象山の遺児恪次郎の処遇をめぐって、当時同人の世話をしていた鹿児島藩と出身藩である松代藩とに働きかけ（2／12／1・5・8、3／7／18、8／9・25）、師匠の息子の行く末を気にかける海舟の姿も見出せる。また、戊辰戦争で海舟の恭順工作に反発し、徹底抗戦を貫いたために新政府軍に痛めつけられた会津（斗南）藩士やその領民へも救いの手を差しのべ、相談に乗るなど（2／5／5、6／30、7／25、8／19、8／29、9／3・4、10／15、3／8／14など）、決して見捨てることがなかった点も海舟の面目躍如といえようか。同藩と接触する上では、海舟の手足となって活動する元会津藩士で静岡藩藩政補翼手附であった林惟純の役割が大きかった（3／1／11・12）。

（2）大学校生徒

多彩な交際といえば、各藩出身の大学校生徒との接触も従来取り上げられてこなかった点であり、注目できる。大学校とは、旧幕府の昌平坂学問所を政府が接収し、昌平学校として開校したもので、明治二年には大学校と改称され、旧開成所・旧医学所をその分局とした教育・行政機関であった。

本冊には、当時の「大学職員教官及生徒名簿」（『東京帝国大学五十年史』所収）から判明した分だけでも、総勢八十五名もの生徒の名前が記載される。その内、鹿児島藩士が三十三名と群を抜いており、それに次ぐ高知・米沢の六名を大きく引き離している。他に堂上関係者・金沢が五名、熊本・福江・柳河が四名、佐土原が二名、その他佐賀・小城・本庄・今治・丸亀・狭山・山口・松代・香春・富山・名古屋・小田原・高取・志筑・人吉・上士家臣が各一名ずつである。

堂上関係者と金沢藩の五名が異例であるものの、鹿児島・高知・米沢・熊本・柳河の各藩士が目立っているのは、幕末・明治初年の海舟人脈の縮図を示しているかのようである。もっとも海舟に接近する理由は各人によって様々であったろうが、当時の大学校が抱えた諸問題、すなわち教官同士の対立（国学派対漢学派、国漢学派対洋学派）、教官と生徒の反目といった混乱が（『東京大学百年史』通史一）、背景にあったであろう事は想像に難くない。校内の紛糾により、同校は明治二年七月四日に一時休業を余儀なくされ、紆余曲折を経た翌年七月十三日には廃校となった。そもそも海舟と同校生徒との交流が、休業状態となった明治二年七月以降であったことは注意すべき点である。

（3）海外留学生

大学校生徒の中には、海舟からの影響もあってか、洋行を志す者も現れた。鹿児島藩士の黒岡帯刀・河島醇・寺田弘・最上五郎・種

田誠一・上村彦之丞らがその部類に属する。

彼らの志願に海舟は尽力を惜しまず、例えば、黒岡帯刀については英学も上達したことだから、希望通り留学させてやってほしいと、大久保利通に取りなしをしている（3／8／2、9／16、『書簡と建言』91）。漢学を学んでいた河島醇も西洋文明に目覚め、海舟に「外国行」を話した（2／12／8）。河島は海舟の書生にもなったようである（3／6／21）。上村は湯地定基と共に海舟を訪ね、「洋行之事必死之話」をしている（3／8／18）。海舟の周旋も効を奏したのであろう、彼らの多くは、明治三年末から翌年にかけて、官費留学生として洋行の夢を果たしていくのである。

官費留学が望めない場合は、ウォルシュ・ホール商会経営者のトーマス＝ウォルシュや同商会番頭の熊谷（松屋）伊助を紹介し、その実現に尽力している。佐土原藩知事島津忠寛の長男島津忠亮と次男丸岡武郎（大村純雄）のアメリカ留学の場合がそれに該当する（2／9／18・19）。両名は藩費による留学を果たした。

要するに海舟は、大久保利通など政府実力者や横浜商人に手蔓があったために、当時の風潮として海外留学をしたければ、海舟のもとを訪ねれば何とかなるだろうといった雰囲気があったのかも知れない。

大学校生徒以外でも、海舟を頼って留学を実現させた多くの面々を本冊より確認することができる。例えば松江藩士の飯塚納から留学の相談を受けた海舟は、知藩事松平定安を説得し、ついに飯塚は藩費留学生として明治四年にフランス留学を実現させる（2／7／13・14・16・27）。佐土原島津家の三男啓次郎は、海舟の書生となり（2／7／19・22、3／2／3）、その後藩費でアメリカに留学し（3／8／27）、海舟の子息小鹿と共にアナポリス海軍兵学校に学ぶに至った。小鹿への送金は前年際だっていたが、海舟は啓次郎にも送金しているのである（3／9／23）。また、浜松藩士飯塚十松がアメリカ留学につき無心した際も、金子を渡している（3／9／21・24）。

ちなみに、アメリカ留学中の小鹿は同行者の高木三郎・富田鉄之助と共に官費留学生となり、留学入費として六〇〇ドルずつが政府より支給され（2／6／22）、パスポートも発給された。その写しが、史料叢書『勝海舟関係資料　文書の部』に収録されている。

それ以前は、海舟は出島竹斎、肥田浜五郎、熊谷伊助、ウォルシュを通じて一〇〇〇両もの大金を小鹿に仕送りしていたが（2／4／20）、官費支給後の送金は見られない。竹斎は駿河国有渡郡小鹿村の名主、肥田は明治二年八月まで静岡藩運送方頭取を務めていた旧幕府軍艦頭にして、元富士山丸の艦長である。アメリカから届いた小鹿の手紙は静岡に到着後、藩の運送船行速丸をもって東京の海舟に運ばれていたことも本冊より判明する（3／6／25）。

（4）国内遊学生

海外留学ではなく静岡藩への遊学、海舟の書生といった、いわば

国内遊学を希望する諸藩士も見られた。例えば大学校生徒で鹿児島藩士の種田誠一や最上五郎は静岡の大久保一翁宅に寄宿し（2／11／6・8）、一翁は海舟よりその教諭を任されている。一翁は両名の気風を愛し、十一月二十日より自宅に引き入れ、学問所の稽古に参加させる積だと海舟に報じている。ただ学問所の若輩（旧幕臣）は、鹿児島藩人と知り「敵国之人と口々に申」すなどなかなか受け入れず、一翁は両人の通行に神経をとがらさなければならなかった。「馬鹿多には困候」とは一翁の嘆きである（講談社版『勝海舟全集別巻 来簡と資料』一－59）。

また、同藩士で大学校生徒の宮内雄蔵も静岡遊学を希望し、金谷原（牧之原）開墾に従事する相原安次郎の元に出向いた（3／8／29、9／5）。山口藩士平岡健、高知藩士壬生拙次郎（豊田弘世）、小田原藩士北村快蔵も静岡行きを決行したようである（いずれも大学校生徒。3／6／21・28、9／28）。その他名前は不明だが、柳河藩士、熊本藩士の遊学希望も確認できる（2／12／14、3／8／15、9／28）。

そして、米沢藩士の宮島誠一郎は、同藩大参事毛利業広の息子で、大学校生徒でもある毛利総八郎の海舟への「入塾」願いをもたらした（2／12／5）。総八郎は一旦大学校を退学し、海舟門下に入りたいと願っていたようで（『来簡と資料』百三十七－4）、事実希望通りに「入塾」が実現した（2／12／16）。同じく大学校生徒で志筑藩士本堂銑太郎も「入塾」希望を抱いていたようである（3／9／10）。

このように、大学校の休校・廃校を契機として、その生徒たちは海外留学・国内遊学へとそれぞれの道を歩んでいく様子が本冊より窺われるのである。

（5）人材の交流

ところで各藩は、静岡藩への遊学だけではなく、同藩士の貸与も求めていた。特に沼津兵学校からの教師派遣を強く求め、彼らは「御貸人」として各藩の軍制改革を指導していくことになる。本冊からは高知、鳥取、徳島からの申し出が確認される。

高知藩では、毛利恭助が沼間守一と永持明徳（2／8／13）、さらに砲術教授の借用を求め（2／11／19）、海舟は静岡藩少参事で軍事掛の藤沢次謙に「御貸人」について相談をしている（2／12／25）。結局、永持の高知行きは実現せず、沼間は英学と練兵を同藩に教授することとなった。

明治三年に入ってからは、鳥取藩や徳島藩から「陸軍心得居候者」「陸軍惣督に成るへき人物并操練教授之者」の借用依頼が相つぎ（3／5／18・20）、鳥取行きには中山謙吉ら三名、徳島行きには石井至凝ら五名が候補に挙がった（3／5／23～25の上欄）。徳島藩では喇叭手一名の増員を求め（『書簡と建言』119）、藤沢次謙や大鳥圭介の招聘も渇望していたようである（『来簡と資料』百八－1）。

沼津兵学校は諸藩の注目の的となり、旧幕府の遺産は政府だけで

はなく、「御貸人」を介して諸藩にも伝わったのである。

各藩士が静岡藩へ遊学するだけではなく、静岡藩士が他藩へ遊学するケースも見られた。例えば、元遊撃隊士の人見寧と梅沢敏が「西国」への遊学を志願すると（3／5／4・5）、海舟は両名へ金子九十両を渡し、鹿児島藩士村田新八へその世話を依頼している（3／5／8）。両名に宛てた海舟の書簡には「同家（鹿児島藩）は卓絶の人有之、純一至誠に出候故と、常々敬服」（『書簡と建言』113）とあり、同藩の気風を推奨している。また酒田（庄内）藩へ修行に出向く山高哲へも金子十両を渡し（3／5／13）、同藩士の岡田斐雄と学費のことで相談に及んでいる（3／6／25、8／2）。

以上のように、本冊からは当時の海舟の置かれた状況・位置のみならず、藩政改革、洋行、人材交流といった明治初年の諸相を読み解く上での重要な諸点を見出すことができるのである。

5私的事情その他

最後に、海舟のプライベートに関することを若干記しておきたい。

東京における海舟の拠点が和歌山藩邸内の長屋であったことは先述したとおりだが、静岡での住まいは明治元年九月の移住以来、同地の鷹匠町におかれていた。

だが、明治三年に入って海舟は安倍郡門屋村名主の白鳥惣左衛門と知り合い、同人と親交を持つうちにその地の景観に強く惹かれていったようである。海舟はここに母信子の隠居所を建てることを決心し、惣左衛門と折衝のすえ土地買収の契約を取り付け（3／1／10・15・18、2／11・25）、同地所二反八畝十一歩（約二八〇〇平方メートル）を金一六五両で買収したのである（3／2／28）。

しかし、信子はここに移り住むに以前に、三月二十三日に「不例」となり、名倉知彰（静岡病院三等医師）や戸塚文海（同病院頭取）の手当も空しく鷹匠町の自宅で六十七歳の生涯を閉じた。二十五日に海舟は母の病死届けを提出している（3／3／23～25）。信子の亡骸は、駿府城の鎮護であり、家康の側室於万の方の供養塔もある日蓮宗蓮永寺に埋葬された。

なお、門屋村の居宅はその後しばらく使用されたが、早くも明治五年に海舟一家は東京赤坂に転居し、以後白鳥家の屋敷内に移築され保存されることとなった。昭和三十二年（一九五七）には、門屋町の宝寿院に寄贈され、「海舟庵」と名付けられ今に至っている。

親族の死といえば、母より以前に海舟の伯母（信子の姉）と思われる兼蓮院も死去している（3／1／11）。静岡学問所三等教授の小田切綱一郎が「碑認来る」とあるのは（3／1／15）、兼蓮院の碑文であろうか。同人も蓮永寺へ埋葬され、同地に碑銘も建てられた（3／2／26）。

また、海舟の子息をめぐっては、明治三年九月十四日、徳川家達付家扶の滝村鶴雄より、岡田斧吉（鶴雄の弟）の相続者として海舟の四男七郎（義徴・母は小西カネ）を立てたい旨、書簡がもたらされた（3／9／14）。斧吉が箱館戦争で戦死したことが直接の原因

だが、この岡田家は、幕末期、海舟が蘭学修行に励んでいた頃の友人岡田新五太郎の家である。海舟は息子を跡目とすることで、今は亡き親友の家名断絶を防いだのであった。同年十一月八日に七郎は岡田家を相続する。ちなみに滝村鶴雄は、明治三十二年（一八九九）に『海舟伝稿』全二十六冊を完了させるなど、公私にわたって海舟を尊敬していたことが知られている。

以上、「海舟日記」第八冊の紹介を通じて、明治二・三年の海舟とその周辺に関して、従来あまり触れられることのなかった点も触れつつ概観してきた。

明治期の海舟をめぐっては、ここ最近、新出史料の発掘が相つぎ（例えば、『太田克巳家文書－勝海舟宛書簡を中心とする資料群－』財団法人多摩市文化振興財団・パルテノン多摩、武田庸二郎「岡本黄石宛勝海舟の書簡について」『世田谷区立郷土資料館資料館だより』No.42など）、さらに近年は、旧幕臣の明治、「敗者」の維新史といった観点からの研究も進んでいる（もっとも海舟が「敗者」かどうかは、議論が分かれるところであろうが）。こうした潮流からすれば、今後は明治以降の海舟を、より本格的に研究していってもよい時期なのかも知れない。その際には、「海舟日記」第八冊以降の明治期の日記が基本史料となることは、改めて指摘するまでもない。本冊の刊行が明治期の海舟及び旧幕臣の研究に寄与することを祈念すると共に、本冊の活用を期待する次第である。

なお、巻末付録として、海舟が関わった重要人物について、簡単な解説文を付した。幕末以来の知己も併せて取り上げている。本解説で指摘し得なかった点は、そちらを参照されたい。また、静岡藩関係者については、江戸時代における経歴も含めて表を作成した。こちらもあわせて参照されたい。

（藤田英昭）

〈付属文書について〉

a　中根淑上書　一綴（口絵写真7・8参照）

縦二四・〇cm×横一六・八cm

二枚の紙を袋綴じにし、墨で書かれている。明治四年（一八七一）正月某日の日付。中根淑から海舟に贈られ、日記に挟み込まれたものとみられる。ただし、上書の年代とこれを挟んだ日記の年代にはずれがある。

漢文で書かれ、戊辰の危機にさいして海舟が徳川方の軍事を引き受け、周囲の無理解のなかを奔走し事態を救ったことを讃えている。さらに、この折に中根淑自身が海舟に対して非難する言動をとったにもかかわらず、のち淑が朝廷に罪を受け潜伏の末静岡に入った時、彼を放逐しようとする有司に対し、海舟がこれを止め、朝廷の追求があれば自分が弁明すると言ってくれたことを述べ、深い感謝の意を表している。

中根淑（一八三九～一九一三）は、通称を造酒次郎といい、香亭と号した。松浦藩儒朝川善庵の外孫で早く父母を失い、幕臣中根家の養子となり、学問を修め剣を伊庭軍兵衛に学んだ。慶応四年（一八六八）鳥羽伏見の戦いに加わり、帰府後は一時海舟の指揮下に入ったが、閏四月十五日脱走歩兵の鎮静のために「中根造酒之進（ママ）・児玉益之進、小田原江同断可行」（「海舟日記」七）と、請西藩主林忠崇と伊庭八郎率いる遊撃隊の軍が拠る小田原へ向かったが、行き先で伊庭らの軍に加わったようである。五月箱根の戦いに敗れると、負傷した伊庭と行動をともにして江戸へ潜伏、八月に榎本武揚率いる幕府艦隊とともに、美嘉保丸に乗船して品川から箱館へ向け脱走した。しかし途中暴風雨に遭い、銚子で難破上陸、中根は江戸へ戻り、そこで乙骨太郎乙の説得を受けて、潜伏ののち静岡に至った。静岡藩では沼津兵学校三等教授となり、廃藩後陸軍参謀局へ出仕、のち文部省編輯官を歴任した。明治十九年に官を辞し、静岡県興津に住し在野の人として余生を送った。

なお、本資料と同様の文章が、明治二十二年発行の雑誌「文」第三巻第十二号に掲載されている。「文」第三巻第四～七号・九号に、「勝伯ノ戊辰ノ記録」と題して海舟の回顧録が連載され、その後を受けて、中根淑が「戊辰記録ヲ読ム」の題で寄稿した文章の最後に紹介している。これによると、海舟の回顧録に対する感想を求められたので、往事を思い出しいくつか手記を取り出して見るうちに、明治三・四年頃沼津から静岡の海舟に対して贈った書の草稿を見つけたため載せたという。文の表現で部分的な異同があり、草稿と海舟に提出した文との違いを比較することができる。

b　「海舟日記抄」抄出指示覚書　一枚（口絵写真9参照）

縦一六・五cm×横五・四cm

紙片に朱書きで、本日記の抄出箇所を指示する貼紙の説明をしたもの。

「海舟日記」のうち、冒頭の文久三年（一八六三）閏八月から本

巻に収録されている明治三年六月までの範囲について、太政官正院内の歴史課および修史館が、維新史編纂における史料収集のため「海舟日記」の抄出を行い、これが「海舟日記抄」の名で流布された。

原本「海舟日記」のうち、第七冊と第八冊の中には、抄出する箇所の始点あるいは終点に、◇の形に切った朱色の紙片が直接貼付されている（「史料叢書」本文の中には、この朱紙の貼られた箇所を◇で表示している）。貼付箇所は、修史館稿本で目賀田家伝来の「海舟日記抄」第七巻（当館所蔵　資料番号９４１００１３８）の抄出箇所とすべて一致する。「海舟日記」抄出作業の具体的な過程を知ることができる資料である。

c　付箋　一枚（口絵写真9参照）

縦四・四㎝×横一・五㎝

前項にみる「海舟日記」抄出作業にかかわる指示をした付箋である。もとは本日記のある箇所に貼付されていたものと思われるが、すでに外れているため元の箇所を特定することはできない。ただし、「日記抄」の抄出箇所との関係からみると、明治二年六月二日条か同年八月二日条の抄出直後の三日をさすのではないかと推定される。

【付録1】「海舟日記」第八冊所出の主要人名辞典

飯塚納（弘化二年〈一八四五〉～昭和四年〈一九二九〉）

松江藩医の家に誕生。元服して脩平と称す。文久二年（一八六二）江戸に遊学し、福沢諭吉から洋学を学び洋行を志す。権藤成卿編「西湖四十字詩」（昭和五年発行）中にある飯塚の略歴によれば、維新後西郷隆盛の知遇を得、外遊の志を告げると海舟を紹介されたという。海舟は松江藩知事松平定安に飯塚の洋行を説き、同人のフランス留学に当たっては、漢詩を贈っている。この間の明治二年（一八六九）、長岡藩士小林雄七郎と大久保利通を訪ね郡県論を述べ、明治三年には集議院に漢字廃止論を呈し、日本独自の「国文」を定めるべきだと主張した。フランス留学中は法律を学び明治十三年帰国。翌年西園寺公望・松田正久らと『東洋自由新聞』を創刊し、自由民権思想の普及につとめた。新聞廃刊後は詩作にふけり、号である西湖山人の名を高めた。晩年は右翼団体黒龍会で活動。

トーマス＝ウォルシュ（一八二七年～一九〇〇年）

アメリカの商人。開国により来日し、横浜に出てフランク＝ホールらと共同でウォルシュ・ホール商会を設立した。事務所がアメリカ居留地一号館にあったので、「亜米一商会」と呼ばれる。海舟はウォルシュや同商会番頭の熊谷伊助を介して、諸藩士の洋行を陰ながら支援した。生糸や茶の輸出を進めながら、明治八年（一八七五）

神戸製紙所を設立し、日本の洋紙製造の先駆者となった。明治十一年、海舟は静岡の産業発展のためにウォルシュを招聘している。

奥平壱岐（生没年不詳）
幕末期における中津藩奥平家の家老。大身衆十一人の一人。中津藩における「亥年の建白事件」の当事者として有名。文久三年（一八六三）、当時無嗣であった八代藩主奥平昌服の養嗣子として、宇和島藩主伊達宗徳の養弟儀三郎（実は伊達宗城三男）を迎えることとなった。この際、中心的役割を演じ成功させたのが、江戸詰家老を勤めていた壱岐であった。ところが、中津藩士の有志が、この件を壱岐の横暴として糾弾、藩主奥平昌服の裁定により壱岐は二〇〇石減俸のうえ、江戸詰家老を罷免された（「亥年の建白事件」）。この結果、壱岐は脱藩し伊予国松山に閉居した。「海舟日記」には、猟官のためか壱岐が、脱藩直後の一時期、度々海舟を訪ねている様子が記されている。維新後、太政官左院の議官を勤め、退任後は文筆業などに専念した。

海江田信義（天保三年〈一八三二〉～明治三十九年〈一九〇六〉）
薩摩藩士・明治後は政治家。子爵。通称は太郎熊。黙声・静山と号す。桜田門外の変に参加した有村雄助・次左衛門兄弟の長兄で、十一歳の時、島津斉興の茶道となり有村俊斎と名乗り、海江田家を継いだ後は武次と改めた。安政五年（一八五八）、藩主島津斉彬の命により一橋慶喜の将軍継嗣擁立に奔走、安政の大獄を機に鹿児島に帰国した。帰国後は、精忠組の中心人物として活動した。文久二年（一八六二）八月の生麦事件でイギリス人商人リチャードソンを殺害したのは海江田である。戊辰戦争では、東海道先鋒総督府参謀として活躍し、特に江戸城受取では穏健派として海舟とともに尽力した。維新後は、貴族院議員、枢密顧問官などの要職を歴任した。

勝小鹿（嘉永五年〈一八五二〉～明治二十五年〈一八九二〉）
海舟の嫡男。慶応三年（一八六七）高木三郎・富田鉄之助を随えアメリカに留学した。ラトガース大学などを経てアナポリス海軍兵学校に入学。海舟から将来を期待されるも、兵学校での成績は余り振るっていなかったようである。一八七六年十月の試験では、第一級生徒四十六人中、海軍築造四十六番、砲術四十六番、航海術・測量術三十九番、といった具合であった。明治十年（一八七七）帰国し海軍大尉、少佐となり、横須賀駐屯副長、造船会議議員などを勤めるも父に先立ち死去。

河島醇（弘化四年〈一八四七〉～明治四十四年〈一九一一〉）
薩摩藩儒の家柄に生まれる。幼名は新之丞。少年期に薩英戦争、禁門の変、鳥羽伏見戦争、会津戦争に従軍。明治二年（一八六九）大学校に入学し、西洋文明の必要性を痛感し留学を志願、明治三年東伏見（小松）宮彰仁親王に随いイギリスに留学した。これは大久保

利通の推薦があったというが、海舟が大久保に斡旋した可能性も高い。のちベルリンに移り明治七年に帰国。外務省に出仕しドイツなどの日本公使館に勤務した。明治十五年伊藤博文の憲法調査に随行して渡欧し、ドイツで財政問題の調査にあたり、帰国後は大蔵省に入った。第一回衆議院選挙に当選し以後連続四回当選。明治三十年議員を辞職し、日本勧業銀行初代総裁となる。その後滋賀県知事、福岡県知事、貴族院議員、北海道庁長官などを勤めた。

川村純義（天保七年〈一八三六〉～明治三十七年〈一九〇四〉）
薩摩藩士・明治後は海軍軍人。伯爵。通称は与十郎。安政二年（一八五五）、藩より選ばれて幕府の長崎海軍伝習所で学ぶ。戊辰戦争では鳥羽伏見・東山道・宇都宮・白河口と歴戦し、特に会津若松城攻撃で活躍した。明治二年（一八六九）、兵部大丞に任ぜられ、以後、兵部少輔・海軍少輔・海軍中将兼海軍大輔・参議兼海軍卿と海軍畑を歴任し、明治十八年に海軍を退いてからは宮中顧問官・枢密顧問官に任じた。海舟とともに明治海軍建設に尽力した人物である。

熊谷伊助（文政八年〈一八二五〉～明治九年〈一八七六〉）
アメリカ人貿易商トーマス＝ウォルシュらが横浜に経営したウォルシュ・ホール商会の番頭。松屋を屋号とした。陸奥の商家の出身で、江戸に出て酒屋に奉公した。慶応年間にウォルシュ・ホール商会の番頭となり、海舟との親交が深かった。海舟は、アメリカ留学中の子息小鹿への送金をウォルシュに頼むさいの取次ぎを、伊助に依頼するなどしている。明治九年没。海舟は伊助の死を悼み歌碑を贈った。

黒岡帯刀（嘉永四年〈一八五一〉～昭和二年〈一九二七〉）
薩摩藩士。妻は得能良介の娘。文久三年（一八六三）薩英戦争に参加。明治二年（一八六九）大学校に入学し、のち大学校分局の大学南校に通学、英学を修めた。翌年海軍操練所に入り兵学も学んだ。この頃郡県制の採用・海軍興隆を主張した建議を政府に提出している。同時期、海舟を頻繁に訪れ、海外事情や海軍育成を示唆されているので、海舟の影響を受けた建議とも考えられる。海舟からは当時謹慎中の榎本武揚の人物評を聞き、その旨を黒田清隆へ内報、榎本の謹慎解除と政府登用にも一定の役割を果たしたことがうかがわれる。明治三年、大久保利通に宛てた海舟の書面が効を奏し洋行が決定、イギリスに留学し航海術や数学などを学んだ。明治六年帰国し海軍軍人として活躍した。明治十三年、有栖川宮威仁親王に随い再渡英し、明治十六年に帰国。日清戦争では軍艦筑波の艦長として出征した。海軍中将となり貴族院議員も勤めた。

黒田清隆（天保十一年〈一八四〇〉～明治三十三年〈一九〇〇〉）
薩摩藩士・明治後は政治家。伯爵。通称は了介。文久三年（一八六三）、薩英戦争に参加して以来、元治元年（一八六四）の禁門の変、

明治元年（一八六八）の鳥羽伏見の戦い・奥羽征討などを歴戦する。特に明治二年の五稜郭攻撃では総督府参謀として総指揮を担当し、降服した榎本武揚の助命に尽力している。また凱旋後は外務権大丞として北蝦夷の処置に関わっている。この間、清隆は蝦夷地の経営について海舟から意見を得ていたことが「海舟日記」からうかがえる。その後、明治三年に開拓次官、明治七年に参議兼開拓長官として、北海道経営に多くの足跡を残した。また、明治二十一年には内閣総理大臣に就任している。

佐久間恪次郎（嘉永元年〈一八四八〉～明治十年〈一八七七〉）
佐久間象山の子息。信州松代に生まれる。文久三年（一八六三）象山が京都で暗殺されると、父の仇討ちのため「三浦啓之助」の変名で一時新選組に入った。象山の死後、一度佐久間家は断絶となったが、恪次郎は象山の門下生に守られ、象山の妻だった海舟の妹順子が養母として後見した。明治に入り名を恪と改め、慶応義塾に学ぶ。司法省に出仕し愛媛県松山裁判所の判事を勤めるが、明治十年松山で急死。

佐藤政養（文政四年〈一八二一〉～明治十年〈一八七七〉）
海舟の門下。通称与之助、李山と号す。庄内藩の出身。海舟に従い長崎海軍伝習所で海軍術を修め、幕府の軍艦操練所蘭書翻訳方出役となる。文久三年（一八六三）、神戸海軍操練所設立のために大坂へ赴き、勝塾の塾頭、海軍操練所教授を勤めた。操練所廃止後、大坂御鉄砲奉行並となって引き続き滞在し、江戸の海舟にしばしば大坂の情勢を伝えた。維新後は新政府に出仕し、鉄道助に任じられて鉄道の敷設に貢献した。

佐野常民（文政五年〈一八二二〉～明治三十五年〈一九〇二〉）
佐賀藩士下村充賛の五男、同藩医佐野常徴の養子。博愛社（のちの日本赤十字社）の創立者。子爵・伯爵。通称は栄寿左衛門。弘化三年（一八四六）、藩命で京都に遊学し蘭学・化学を習得、ついで大坂の緒方洪庵塾で医学を学ぶ。弘化四年から長崎に遊学し、安政二年（一八五五）に幕府が長崎海軍伝習所を開設すると藩より選ばれて第一期生として参加する。慶応三年（一八六七）、パリ万国博覧会開催を機に渡仏し、語学・諸技術を習得し、国際赤十字の組織と活動を見聞している。帰国後の明治三年（一八七〇）に兵部少丞となり海軍掛を拝命する。「海舟日記」には、兵部少丞となった常民が鉄道敷設に関して海舟に相談を持ちかけている様子などが散見する。以後、工部大丞・元老院議官・大蔵卿・元老院議長・枢密顧問官・農商務大臣など要職を歴任する。また、明治十年の西南戦争に際して博愛社を設立し日本赤十字社の基礎を創っている。

島津（町田）啓次郎（安政四年〈一八五七〉～明治十年〈一八七七〉）
佐土原藩主島津忠寛の三男。幼少期、寺社奉行町田宗七郎の養子と

なり町田を名のる。維新後海舟の書生となり、明治三年（一八七〇）その勧めによりアメリカに留学し自由平等思想に影響を受けた。のちアナポリス海軍兵学校で修行し、明治九年帰国した。その後同志とはかり民主主義的な学校自立舎を創設し人材を育成。明治十年の西南戦争では藩閥政府を批判し、西郷軍に参加した。啓次郎の率いる佐土原隊は熊本の各地を転戦するも、鹿児島の城山で戦死。

清水卯三郎（文政十二年〈一八二九〉～明治四十三年〈一九一〇〉）洋書・西洋道具商「瑞穂屋」主人。武蔵国出身。江戸で蘭学を修め、慶応三年（一八六七）パリ万国博覧会で渡仏して美術工芸品を出品した。滞仏中七宝や石版印刷等西洋の技術を学んで慶応四年（一八六八）五月に帰国、浅草森田町に店を開いた。明治二年（一八六九）本町三丁目に移転。海舟とは幕末期からの親交があり、本日記中からは、明治元年に長岡で死去した鵜殿団次郎（白峰駿馬の兄）の著書（「万国奇観」か）の出版に卯三郎が関わっていることがうかがえる。日本で初めて石版印刷を行い、洋書の翻刻を盛んにするなど、西洋技術の伝播に貢献した。

白鳥惣左衛門（文化十四年〈一八一七〉～明治二十三年〈一八九〇〉）駿河国安倍郡門屋村（現静岡市門屋）の名主。明治元年（一八六八）九月に海舟の家族は駿府鷹匠町に移住したが、同三年初めに海舟は駿府郊外の門屋を訪れ、惣左衛門から三反弱の土地を購入した。この地に老母信子の隠居所を建てる計画だったが、購入後まもなく信子は死去した。その後も海舟と惣左衛門との交流は続き、門屋の家屋・山林等は長く白鳥家が管理した。

白峰駿馬（天保七年〈一八三六〉～明治四十二年〈一九〇九〉）長岡藩出身。鵜殿団次郎の弟。文久二年（一八六二）出府し、兄の知己である海舟門人となり航海術を学ぶ。その後海舟主宰の神戸海軍操練所で坂本龍馬らと海軍修行に励んだ。海舟帰府後は龍馬結成の海援隊で活躍。明治元年（一八六八）アメリカに留学し、明治七年の帰国まで造船学などを学んだ。留学中、兄団次郎の著作物刊行を海舟に依頼している。帰国後海軍省に入り、明治九年に洋式帆船の白峰丸を建造。辞官後は、神奈川で日本初の民間造船所、白峰造船所を設立した。明治十四年の第二回内国勧業博覧会では、同造船所が出品した「風帆船雛形」が有効一等賞を受賞している。軍器の開発を進め、鉄船軍器「端舟」は日清戦争で多大な威力を発揮した。

高木三郎（天保十二年〈一八四一〉～明治四十二年〈一九〇九〉）庄内藩士の子。安政七年（一八六〇）海舟門下となり、同門の富田鉄之助と親交を結ぶ。慶応三年（一八六七）富田と共に勝小鹿に随いアメリカに留学し、ボストンで英語を学び、後にラトガース大学に入学した。滞米中に幕府瓦解と東北戦争を知ると富田と急遽帰国したが、海舟に諭されて再び渡米した。明治五年（一八七二）以降、

滞米し外交官として活躍。この間明六社の海外通信員になった。明治十三年の辞職後は、横浜で生糸直輸出に尽力した。

武内孫介（文化十四年〈一八一七〉～明治二十三年〈一八九〇〉）
和歌山藩士。長州再征の際、米英仏三国の協力を得て、長州を征討すべきと幕府に建白した幕権拡張論者。慶応二年（一八六六）末に、「新聞会」を組織し、譜代藩留守居役と政治情報を交換した。大政奉還を知ると幕権回復を謀って譜代連合を画策し薩摩藩に対抗した。戊辰戦争の進展に伴い恭順に転じ、彰義隊鎮撫に尽力し、赤坂の自宅を追われた海舟に和歌山藩邸内の長屋を提供した。明治四年（一八七一）市井の雑事や建白書を集めた『新聞輯録』を創刊し、近代新聞報道の原型を作った。息子で書家の桂舟によれば、孫介は早くから洋食を食べ、早々に断髪した「ハイカラの人」だったという。晩年は長男扶（桂舟の異母兄）の焼身自殺などで不遇。

富田鉄之助（天保六年〈一八三五〉～大正五年〈一九一六〉）
仙台藩士の四男。文久三年（一八六三）海舟に入門し、蘭学・航海術・砲術などを学ぶ。慶応三年（一八六七）高木三郎と共に勝小鹿に随いアメリカに留学し、明治三年（一八七〇）にはウィリアム＝C＝ホイットニーが校長を務めるビジネスカレッジに入学、経済学を修めた。その後ニューヨーク副領事等を歴任し外交畑で活躍する。この間、福沢諭吉の媒酌で杉田阿縫（杉田成卿長女）と結婚するが、この時男女平等に根ざす婚姻契約書を作り話題となった。森有礼と共に商法講習所（のちの一橋大学）の設立に尽力し、明治八年にはホイットニー一家の招聘に一役買った（娘クララは、海舟の三男梅太郎夫人となる）。明治十四年には大蔵省に転じ日本銀行創立に尽力し、同総裁となるがまもなく辞任。帝国議会開設と共に勅選貴族院議員、東京府知事にもなった。その後実業界に転じ、富士紡績社長・横浜火災海上社長等を歴任した。教育事業にも熱心で、共立女子職業専門学校の設立にも関わった。

浜口梧陵（文政三年〈一八二〇〉～明治十八年〈一八八五〉）
和歌山の商人。通称は儀兵衛。銚子に進出した紀伊国有田郡広村の醤油醸造元の養子となり、家業のかたわら社会事業に熱心に取り組んだ。安政大地震では広村村民を津波から救済したことで知られる。海舟とは旧くからの知己で、経済的な支援のほか、国事に奔走し和歌山藩と海舟との仲立をするなどの関係があった。明治元年（一八六八）和歌山藩の勘定奉行となり、翌二年に藩少参事、三年に大参事に任ぜられた。明治十三年、初代和歌山県会議長となった。明治十八年旅行先のアメリカで死去。

福田敬業（文政元年〈一八一八〉～明治二十八年〈一八九五〉）
江戸の書肆。通称は半蔵、号は鳴鵞草衣など。下野（葛生町）の出身で、江戸で書肆万屋兵四郎の娘婿となり兵四郎の名を継いだ。万

延元年（一八六〇）幕府の蕃書調所御用掛となり、洋書の翻訳版の刊行をおこなった。出版業を通じて海舟との縁が深く、海舟の依頼で開成所版「万国公法」と海軍所版「大日本国沿海略図」出版を手がけている。慶応三年（一八六七）金沢藩に出仕し、明治二年（一八六九）金沢藩公用人、同四年同藩大属兼少参事をつとめた。廃藩置県後の明治五年東京府典事、同八年七等出仕となり、同十三年に致仕した。明治十四年内国勧業博覧会審査官をつとめ、『東京日日新聞』の創刊にもかかわった。

町田久成（天保九年〈一八三八〉～明治三十年〈一八九七〉）
薩摩藩士、本邦博物館の創設者。通称は民部。石谷と号す。安政四年（一八五七）、江戸に出て昌平黌に学び、慶応元年（一八六五）の英国留学生派遣では上野良太郎の変名で渡英、開成所学頭として留学生を監督した。慶応三年に帰国後、参与職外国事務局判事・長崎裁判所判事・外務大丞などを歴任し、明治四年（一八七一）に文部大丞になって以後は、オーストリア国博物館御用掛・米国博覧会事務局長・内務省内国勧業博覧会審査官など、博物館・博覧会に関する要職を歴任した。特に明治八年には、内務省に博物館設置の建言をし、博物館の創設に尽力している。

宮島誠一郎（天保九年〈一八三八〉～明治四十四年〈一九一一〉）
米沢藩士。栗香・養浩堂と号す。藩校興譲館の定詰勤学生となる。戊辰戦争時には藩の探索方を命じられ、奥羽戦争を防ぐための和平工作に奔走した。この時海舟と知り合い、海舟は宮島に時勢に関する助言をし、大久保利通など薩摩藩の要人を紹介した。その後も海舟が没するまで両者の親交は続いた。明治三年（一八七〇）、新政府の待詔院下局出仕を命じられ、同四年太政官左院少議官、同十年修史館御用掛、同十七年参事院議官補などをへて、同二十九年貴族院議員となった。中国問題に関心が深く、何如璋や黎庶昌など清国公使との交流があった。晩年の海舟も宮島の仲介で清国公使等との交際を持ち、そのことが日清戦争をめぐる彼の言論に影響を与えた。次男大八（詠士）は清国に留学して有名な書家となり、善隣書院を設立した。

柳原前光（嘉永三年〈一八五〇〉～明治二十七年〈一八九四〉）
堂上公家。伯爵。慶応三年（一八六七）、国事助筆御用掛・参与助役となって以来、国事に参与し、戊辰戦争では、東海道鎮撫副総督・先鋒副総督兼鎮撫使・東征大総督府参謀などに任じ、江戸入城・甲州・総武地方の鎮定で活躍した。明治二年（一八六九）、外務省出仕となり、以後、外務大丞・少弁務使・代理公使などを勤めている。特に外務大丞となった柳原は、朝鮮問題の処理を担当し、造詣の深い海舟から教えを請うた様子が「海舟日記」に記されている。明治七年より駐清公使となり、清国との条約締結交渉に奔走、また台湾事件の和平交渉を担当した。明治八年に元老院議官となり、賞勲局

総裁・枢密顧問官・宮中顧問官を歴任するなど、公家出身官僚の俊英として活躍した。

横井左平太（弘化二年〈一八四五〉～明治八年〈一八七五〉）熊本藩士。大平の兄。小楠の甥。元治元年（一八六四）小楠の推薦で海舟主宰の神戸海軍操練所に入り、翌慶応元年、長崎語学校のフルベッキから語学を学ぶ。同二年弟大平とともに渡米、伊勢佐太郎と変名してラトガース大学に入学し、航海学などを学んだ。明治二年（一八六九）、海舟の息子小鹿とともにアナポリス海軍兵学校に入学するが、途中海軍修行をあきらめ退学。帰国後の明治八年元老院権少書記官となるが、肺結核のため死去。

横井大平（安政六年〈一八五〇〉～明治四年〈一八七一〉）左平太の弟。小楠の甥。文久二年（一八六二）出府し洋書調所で英語を学んだ。元治元年（一八六四）兄とともに神戸海軍操練所に入り航海術を学び、翌慶応元年、長崎語学校に転じた。翌二年渡米し、伊勢多平太（のちに沼川三郎）と変名してラトガース大学に入学する。肺病のため明治二年（一八六九）末帰国。熊本に洋学校を設立し、フルベッキを介して外国人教師の招聘を計画するがまもなく死去。

（田原昇・藤田英昭）

【付録２】「海舟日記」第八冊所出の静岡藩関係者データ

（凡例）

・本表は「海舟日記」第八冊に登場する静岡藩関係者の、明治２・３年の役職、江戸時代の経歴・役職、その後の経歴等をあらわしたものである。ただし、履歴等が判明した分だけで、日記中の関係者すべてを網羅したわけではない。

・本表作成にあたっては、主に静岡藩の役職ごとに分類・整理し、それぞれ50音順に並べた。

・本表作成にあたっては、主に以下の諸文献を活用した。小川恭一編『寛政譜以降旗本家百科事典』全６巻（東洋書林）、前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』全４巻（私家版）、樋口雄彦『旧幕臣の明治維新－沼津兵学校とその群像－』（吉川弘文館）、『沼津兵学校』（沼津市明治史料館）など。

・本表は藤田英昭が作成した。

分類	名　　前	静岡藩における役職と足跡（明治２・３年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
知藩事	徳川家達	知藩事	田安家当主	貴族院議長，ワシントン会議全権委員
藩庁要職	朝倉景寛（藤十郎）	少参事・監正掛	小納戸，目付	静岡第57区戸長
	浅野氏祐（次郎八）	中老，権大参事・政事庁掛	大目付，外国奉行，若年寄	徳川宗家家令
	石川利行（渡）	権少参事・監正掛	軍艦奉行支配組頭勘定方，勘定組頭	浜松県・海軍省出仕
	大久保忠寛（一翁）	中老，権大参事・藩政補翼・家令	御側御用取次，若年寄	東京府知事，元老院議官，子爵
	大久保忠恕（樫軒）	三河赤坂奉行，少参事・刑法掛・市政掛	目付，長崎奉行，大目付	
	織田信重（和泉・泉之）	中老，権大参事・郡政掛	目付，大目付	浜松県出仕
	男谷勝三郎	目付助，横須賀奉行，権少参事・郡制掛	小納戸	男谷精一郎の子息
	河田熙（貫之助）	大目付，少参事・学校掛	儒者，第２次遣欧使節団に随行，開成所頭取，大目付	家達に従い渡英，徳川宗家家扶
	河野通和（九郎・左門）	中老，権大参事・会計掛	歩兵奉行，留守居	
	小林政富（甚六郎）	権少参事・監正掛	軍艦取調役組頭，目付	
	杉浦八郎五郎	目付，権少参事・政事庁掛	書院番頭，銃隊頭並	静岡第47区戸長
	津田真道（真一郎）	少参事・藩庁掛・学校掛	津山藩士，海舟食客，オランダ留学，目付	刑法官権判事，明六社に参加，元老院議官，初代衆議院副議長，男爵，法学博士
	妻木頼矩（務）	少参事・公議人，権大参事	昌平黌学問助教授方，儒者，目付	名古屋県権大参事，料理店開業，『横浜毎日新聞』主事，帝国博物館校正掛
	戸川安愛（平左衛門・平太）	中老，権大参事・公用掛・監正掛	目付	廃藩後備中窪屋郡羽島村に帰農，東京府学務御用掛，窪屋郡長
	富永雄造（孫太夫）	相良奉行支配割付，中老，権大参事・刑法掛	講武所教授方出役，歩兵頭，歩兵奉行	
	中台信太郎	少参事・刑法掛		
	服部常純（綾雄）	中老・陸軍総括，権大参事・軍事掛	長崎奉行，勘定奉行，海軍奉行，若年寄	左院出仕，学習院教授

分類	名前	静岡藩における役職と足跡（明治２・３年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
藩庁要職	平岡準(四郎)	勘定頭，権少参事・会計掛	歩兵頭並，目付，外国奉行，大坂町奉行	宇和島県令
	藤沢次謙(長太郎)	陸軍御用重立取扱，少参事・軍事掛	軍艦奉行，歩兵奉行，陸軍副総裁	浅野氏祐の義弟，左院議官，元老院書記官
	牧野成行(田三)	寄合頭，権少参事・監正掛	小納戸，中奥小姓，目付，歩兵頭	司法省出仕，栃木裁判所判事長
	松平信敏（甚太郎・甚兵衛）	目付，少参事・政事庁掛	目付，大坂町奉行，大目付	大蔵省・内務省出仕
	宮田正之(文吉)	権少参事・会計掛	下田奉行支配調役，外国奉行支配組頭	静岡県・開拓使出仕
	矢田堀鴻	権少参事・軍事掛	軍艦奉行並，海軍総裁	左院・内務省・農商務省出仕
	山高信離(慎八郎)	相良奉行，権少参事・監正掛	中奥番，小納戸，目付，パリ万博遣仏使節団に随行	大蔵省・内務省出仕，東京帝室博物館長
藩政補翼	大儀見元一郎	藩政輔翼付属	評定所書役	アメリカ留学，キリスト教伝道師，三井鉱山採鉱技師
	林惟純(三郎)	使番幹事役付属，藩政補翼手附，宣教掛	上海使節団，麹町教授所塾頭	静岡第52区長，富士宮浅間神社宮司
	水沢主水	幹事役付属，小島添奉行		
	山岡鉄舟(鉄太郎)	幹事役，権大参事・藩政補翼	浪士取締役，精鋭隊頭	茨城県参事，伊万里県令，侍従，宮内少輔，子爵
公議人	杉浦誠(梅譚)	公議人	鉄砲玉薬奉行，目付，箱館奉行	外務省出仕，開拓判官，晩翠吟社創立
公用人	朝倉俊徳(勘四郎)	用人	二条城御側御用取次，小納戸頭取	
	小田又蔵	公用人	勘定組頭，大坂具足奉行，蕃書調所組頭，勘定吟味役	
	小林年保(長次郎)	公用掛下役	日光学問所助教，徳川家廟墓取調下役	兵庫県・小倉県・秋田県出仕，第三十五銀行顧問
	佐久間信義（鐳五郎）	御用人	大砲組頭，神奈川奉行，駿府町奉行	
	杉山秀太郎(一成)	公用人	勘定所普請役　精鋭隊取締	大蔵省・内務省出仕
	鈴木半造	公用掛公用方下役		
	東条悦三郎	公用掛公用方中役		
	野口次郎	公用人差添役，公用掛少属	評定所留役	
	橋爪正英(正一郎)	公用掛公用方中役，権少属	表台所人見習	内務省出仕
勘定頭	加藤弘之(弘蔵)	大目付，勘定頭	開成所教授職並，目付，大目付	政体律令取調御用掛，東京帝大総長，貴族院議員，枢密顧問官
家令・家扶	梅沢守義(孫太郎)	大目付，慶喜付家令	水戸藩士，目付	
	酒井忠恕(録四郎)	側用人，家達付家令	目付，寺社奉行並	忠績の弟。陸軍歩兵少佐
	滝村鶴雄(小太郎)	家達付家扶	勘定出役　（取箇方廻米方），奥右筆	『海舟伝稿』執筆，音楽関係の翻訳・著作多数

分類	名前	静岡藩における役職と足跡（明治２・３年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
家令・家扶	成田新十郎	慶喜付家扶	一橋附小姓頭取	
	溝口勝如（八十郎）	側用人，家達付家令	目付，歩兵頭，陸軍奉行並，田安家家老	
	室賀正容（竹堂）	家達・慶喜付家令	大目付，御側御用取次	明治学校設立
勤番組関係者	飯塚年整（廉作）	掛川勤番組一等勤番，掛川小学校教授	徒目付	十松（明治３年アメリカ留学）の兄，東京府出仕
	井上清虎（八郎）	用人，浜松・中泉勤番組之頭	講武所師範役，遊撃隊頭	水俣県・浜松県・静岡県出仕，掘留運河開発
	上田閑江（作之丞）	公用人，相良勤番組之頭	評定所留役	
	宇都野正安（鐘之進）	目付，中泉奉行支配割付	歩兵差図役頭取，使番	
	大久保忠宣（四郎左衛門）	府中奉行支配割付	神奈川奉行，大目付，駿府町奉行	
	久世広吉（平九郎）	静岡勤番組之頭	小普請掛用人	
	桜井秀雄（庄兵衛）	横須賀奉行，赤坂勤番組之頭	目付	
	白戸隆盛（石介・砂）	書院組頭，沼津勤番組之頭	騎兵頭並，陸軍副総裁，大目付	陸軍中佐，軍馬局長
	高橋泥舟（精一）	田中奉行，田中勤番組之頭	講武所槍術師範，浪士取締役，遊撃隊頭	山岡鉄舟の義弟
	田村弘蔵	浜松添奉行，浜松勤番組之頭並	騎兵差図役勤方	
	中村則秀（六三郎）	田中奉行支配割付	長崎海軍伝習所で学ぶ	広島師範学校長，東京商船学校長
	成瀬蔵（吉右衛門）	目付助，相良勤番組之頭並	使番	相良石油会社勤務
	新見史雄	横須賀添奉行		
	本多晋（敏三郎）	赤坂奉行支配割付	一橋家徒目付，彰義隊頭取	民部省・大蔵省出仕，横浜正金銀行員，上野東照宮社掌
	前島密（来助）	公用人，浜松・中泉添奉行，開業方物産掛	軍艦操練所見習生，開成所教授，徒目付	民部省・内務省出仕，逓信次官，北越鉄道社長
	前田五門（五左衛門）	目付助，田中勤番組之頭	小姓組，広敷御用達	静岡英学校教師，函右日報社長
	山田政発（虎次郎）	勘定頭並公用人，府中奉行添奉行，掛川勤番組之頭	勘定吟味改役，勘定頭取	大蔵省・工部省・海軍省出仕
	由利元（元十郎）	静岡勤番組之頭並	遊撃隊士	相良石油会社社員，静岡第４・５区戸長
開墾関係者	相原安次郎	権少参事・郡政掛・開墾方頭取，金谷原（牧之原）開墾	精鋭隊頭取	茨城県出仕，静岡県警部長，慶喜付家令
	石坂宗順（周造）		浪士組・新徴組	油田開発，相良石油会社設立
	大草高重（多喜次郎）	新番組頭並，開墾掛頭並	精鋭隊頭取並	
	久保勝善（栄太郎）	開墾掛開墾方頭取	精鋭隊頭取	

分類	名前	静岡藩における役職と足跡（明治2・3年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
開墾関係者	関口隆吉（艮輔）	公儀人，公用人，金谷原開墾方頭取格	精鋭隊頭取	新村出の父。三潴県参事，山形県令，山口県令，元老院議員，静岡県知事
	立田政吉郎	開業方		
	中条景昭（金之助・潜助）	新番組之頭，開墾掛頭	講武所剣術師範，新徴組支配，精鋭隊頭	金谷原開拓の先駆者
	松岡万	開墾掛並，水利路程掛，製塩方頭	鷹匠組頭の子，精鋭隊取締	静岡県の干拓事業，東京府・内務省警視庁出仕
	村上政忠（俊五郎）	府中奉行所市中取締，開墾御用，横須賀勤番組之頭	浪士組	妻は海舟妹，宮内省出仕
開業方他	渋沢栄一	商法会所頭取	一橋家家臣，パリ万博参加	民部省・大蔵省出仕，第一国立銀行頭取
	白野夏雲（耕作）	十勝詰開業方御用取扱		開拓使・内務省・鹿児島県・北海道庁出仕，札幌神社宮司
	堀利孟（小四郎）	十勝詰開業方頭	目付，神奈川奉行，大坂町奉行，大目付	利熙（目付・外国奉行）の子息
沼津兵学校・陸軍関係者	赤松則良（大三郎）	沼津兵学校一等教授	咸臨丸で渡米，オランダ留学，軍艦役並	兵部省出仕，海軍中将，男爵，貴族院議員
	阿久沢新吉	沼津兵学校資業生，徳島藩御貸人		
	阿部潜（邦之助）	沼津兵学校設立，陸軍御用重立取扱，少参事・軍事掛，鹿児島招聘	歩兵差図役勤方	阿部正外（老中・白河藩主）の弟，岩倉遣外使節随行，尾去沢銅山経営，養蚕・醤油醸造業
	伊熊淳一（醇一郎）	徳島藩御貸人	陸軍小筒役差図役並	陸軍中尉
	石井至凝（新八）	沼津兵学校資業生，徳島藩御貸人	小筒差図役頭取	茨城県・外務省出仕，茨城県師範学校教師，横浜税関雇
	江原素六	沼津兵学校設立に尽力，少参事・軍事掛	講武所砲術教授，歩兵差図役頭取，撒兵頭	自由党員，麻布中学校校長，貴族院議員
	小山教能（弥吉）	徳島藩御貸人	撒兵差図役頭取，陸軍小筒組差図役頭取	陸軍省出仕
	杉亨二	沼津兵学校員外・二等教授	開成所教授並	海舟門下，日本統計学の始祖，太政官・正院・統計院出仕，法学博士
	瀬名鉄太郎	鳥取藩御貸人		
	塚本明毅（桓輔）	沼津兵学校一等教授方・2代目頭取	軍艦操練所教授，小笠原諸島の測量	兵部省出仕，太政官地理課長，太陽暦採用，『皇国地誌』『府県史料』編纂
	中根淑（造酒次郎・香亭）	沼津兵学校三等教授	漢学者	榎本艦隊の美嘉保丸で海難，陸軍少佐，文部省編輯官
	永持明徳（五郎次）	沼津兵学校三等教授，高知藩御貸人候補	第1次遣欧使節団に随行，大砲差図役頭取	亨次郎の養子，陸軍砲兵中佐，育英黌（現東京農業大学）黌長
	中山謙吉	鳥取藩御貸人		
	西周（周助）	沼津兵学校頭取	蕃書調所教授手伝，オランダ留学	兵部大丞，陸軍大丞，宮内省御用掛，東京高等師範学校校長，貴族院議員

分類	名前	静岡藩における役職と足跡（明治２・３年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
沼津兵学校・陸軍関係者	沼間守一（慎次郎）	高知藩御貸人	歩兵奉行並	自由民権運動に参加
	函館大経（儀三郎）	沼津兵学校御馬方，福岡藩御貸人	陸軍乗馬差図役並	競馬騎手，開拓使出仕，明治三大馬術家の一人
	原胤列（新七郎）	沼津兵学校資業生，徳島藩御貸人	歩兵頭並	陸軍大尉
	伴鉄太郎	沼津兵学校一等教授	軍艦操練所教授方出役，咸臨丸測量方，軍艦頭	海軍大佐
	房間虎次郎	鳥取藩御貸人		
	矢吹秀一	沼津兵学校資業生	陸軍小筒役差図役並	鹿児島藩兵学校教授，陸軍工兵家軍人，富士生命保険会社社長
戦争降伏人	荒井郁之助		順動艦長，歩兵頭並，軍艦頭	箱館降伏人，開拓使・内務省出仕，中央気象台長
	今井信郎		京都見廻組，龍馬暗殺，衝鋒隊士	箱館降伏人，静岡県・内務省出仕，金谷原開拓，榛原郡初倉村長
	梅沢敏（鉄三郎）	鹿児島藩遊学	遊撃隊	梅沢孫太郎（慶喜の側近）の子息，酒田降伏人，静岡県学務課長，静岡県会議員
	榎本武揚		長崎海軍伝習生，オランダ留学，開陽艦長，海軍副総裁	箱館降伏人，開拓使出仕，逓信・農商務・文部・外務大臣，枢密顧問官
	小菅知淵（辰之助）	和歌山藩御貸人	開成所組頭，砲兵差図役頭取，工兵頭並	箱館降伏人，陸軍士官学校教官，参謀本部測量部長，陸地測量に功績
	柴誠一		江川代官鉄砲方付手代，軍艦頭	第二長崎丸乗組員，酒田降伏人，海軍少佐
	人見寧（勝太郎）	鹿児島遊学	遊撃隊士	箱館降伏人，内務省出仕，茨城県知事，利根運河会社社長
	古川正雄（節蔵）		軍艦役並勤方，高尾艦長	福沢諭吉門下，宮古湾海戦で降伏，明六社参加，訓盲院設立，キリスト教徒
	矢口謙斎		伝習隊	箱館降伏人，明治３年隠棲，私塾を開く
	山高鍈三郎		遊撃隊士	酒田降伏人
海軍関係者	片山雄八郎（椿助）	軍事掛軍事俗務方頭取	軍艦頭並	
	桜井貞蔵	船運方俗事重立取扱	海軍所取調役	
	佐々倉桐太郎	海軍学校頭，権少参事・郡政掛・水利路程掛	長崎海軍伝習生，咸臨丸で渡米，軍艦役	海軍兵学寮権頭
	肥田為良（浜五郎）	海軍学校頭，運送方頭取	長崎海軍伝習生，咸臨丸蒸気方，軍艦頭，富士山艦長	民部省・工部省出仕，横須賀造船所長官，海軍機関総監，宮内省御料局長官
学問所	江連堯則（真三郎）	静岡学問所附属小学校頭取	外国奉行，目付	東多摩郡長
	小田切鋼一郎	静岡学問所三等教授	歩兵差図役頭取勤方，開成所調役並	

分類	名前	静岡藩における役職と足跡（明治２・３年）	旧幕経歴・役職	備考・その後の経歴
学問所	三田葆光（箕麓）	静岡学問所三等教授	国学者，遣仏使節団に随行	御茶の水高等学校教師
	向山黄村	静岡学問所頭，少参事・学校掛	外国奉行支配組頭，目付，パリ万博遣仏使節団に随行	東京で隠棲
病院医師	柏原孝幸（学而）	静岡病院二等医師	適塾で蘭方医学を学ぶ	静岡で病院開業
	杉田玄端	沼津病院医師頭取	蕃書調所教授方，開成所教授	杉田玄白の子立卿養子，共立病院設立
	戸塚文海	静岡病院病院頭並	慶喜の侍医	海軍軍医総監，東京慈恵医院・日本赤十字社創設
	名倉知彰（弥五郎）	静岡病院三等医師	陸軍馬医取締	千住の接骨医，陸軍省軍医
	林紀（研海）	静岡病院病院頭	オランダ留学	陸軍軍医総監
前藩主他	駒井朝温（竹所）		大目付，陸軍奉行並，海軍奉行並	田安家家扶
	酒井忠績（閑亭）	（久能山取締）	姫路藩主，老中，大老	明治13年分家，男爵
	松平斉民（確堂）	（家達の後見人）	津山藩主	麝香間祗候，正三位，勲二等

本巻の編集にあたり、左記の方々より多くのご教示をいただくことができた。末筆ながら深く謝意を表する。なお、日記に登場する人物については不明な点がまだ多くあるため、諸方面の方々からのご教示を乞う次第である。

内山幸一（柳川市史調査研究員）　刑部芳則（中央大学）　土金師子（日本女子大学）　徳江靖子（明治維新史学会会員）　友田昌宏（中央大学）　樋口雄彦（国立歴史民俗博物館）　松浦玲（歴史家）

〈参考文献〉（人名注記・解説・付録で使用）

【史料・文献】

勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集』一九（勁草書房　一九七三）

勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』二・別巻（講談社　一九八二・九四）

小西四郎編『勝海舟のすべて』（新人物往来社　一九八五）

杉本勝二郎編『華族列伝　國乃礎』上中下（華族列伝國乃礎編輯所　一八九二・九三）

大植四郎編著『明治過去帳〈物故人名辞典〉』（東京美術　一九七一新訂）

『百官履歴』一・二（日本史籍協会叢書　東京大学出版会　一九七三覆刻）

寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』一（寺岡書洞　一九七六）

朝倉治彦編『明治初期官員録・職員録集成』二（柏書房　一九八一）

東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』上（一九三二）

東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史』通史一（東京大学一九八四）

橋本政次『姫路城史』下（姫路城史刊行会　一九五二）

『静岡市史』近代・通史編史料編（静岡市　一九六九）

堀内信編『南紀徳川史』四（名著出版　一九七〇）

上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』（名著出版　一九七三）

鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料　忠義公史料』六（鹿児島県　一九七九）

『静岡県史』資料編16・近現代一（静岡県　一九八九）

『静岡県史』通史編5・近現代一（静岡県　一九九八）

山田万作編『岳陽名士伝』（長倉書房　一九八五復刻）

静岡新聞社出版局編『静岡県歴史人物事典』（静岡新聞社　一九九一）

『薩陽武鑑』（尚古集成館　一九九六）

新人物往来社編『新選組大事典コンパクト版』（新人物往来社　一

九九九）
渋沢青淵記念財団竜門社『渋沢栄一伝記資料』二（渋沢栄一伝記資料刊行会　一九五五）
『大久保利通日記』二（日本史籍協会叢書　東京大学出版会　一九六九覆刻）
佐藤政養遺墨研究会編『政養佐藤与之助資料集』（佐藤政養先生顕彰会　一九七五）
伴五十嗣郎『松平春嶽未公刊書簡集』（思文閣出版　一九九一）
「山高信離関係文書目録」「山高信離略年譜」（『戸定論叢』二　一九九二）
慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』一（岩波書店　二〇〇一）
山川健次郎監修『会津戊辰戦史』（マツノ書店、二〇〇三復刻）
「武内孫助筆記」（国立公文書館内閣文庫所蔵）
前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』一～四（私家版　一九九一・九三・九七・二〇〇〇）
前田匡一郎『徳川慶喜邸を訪ねた人々－「徳川慶喜家扶日記」より－』（羽衣出版　二〇〇三）
関口隆正『関口隆吉伝』（何陋軒書店　一九三八）
阿部龍夫『塩田順庵と海防彙議』（無風帯社　一九四四）
加茂儀一『榎本武揚』（中央公論社　一九六〇）
植手通有編『西周・加藤弘之』（日本の名著　中央公論社　一九七二）
井黒弥太郎『榎本武揚伝』（みやま書房　一九六八）
吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁－富田鉄之助伝－』（東京経済新報社　一九七四）
土屋重朗『近代日本造船事始－肥田浜五郎の生涯－』（新人物往来社　一九七五）
赤松範一編注『赤松則良半生談』（東洋文庫　平凡社　一九七七）
松岡英夫『大久保一翁』（中公新書　一九七九）
草薙金四郎『松崎渋右衛門伝とその史料』（高松ブックセンター　一九八一）
河野弘善『河島醇伝－日本勧業銀行初代総裁－』（河島醇伝刊行会　一九八一）
田中誠三郎『佐久間象山の実像』（銀河書房　一九八三）
藤井哲博『咸臨丸航海長　小野友五郎の生涯』（中公新書　一九八五）
田畑忍『加藤弘之』（人物叢書　吉川弘文館　一九八六）
原田朗『荒井郁之助』（人物叢書　吉川弘文館　一九九四）
土居良三『軍艦奉行木村摂津守』（中公新書　一九九四）
田口英爾『最後の箱館奉行の日記』（新潮選書　一九九五）
白石良夫『最後の江戸留守居役』（ちくま新書　一九九六）
大久保利謙編『津田真道　研究と伝記』（みすず書房　一九九七）

土居良三『咸臨丸 海を渡る』（中央公論社　一九九八）
A．B．ミットフォード著・長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』（講談社学術文庫　一九九八）
上野利三・高倉一紀編『伊勢商人 竹口家の研究』（和泉書院　一九九九）
高木不二『横井小楠と松平春嶽』（幕末維新の個性2　吉川弘文館　二〇〇五）
樋口雄彦『旧幕臣の明治維新－沼津兵学校とその群像－』（吉川弘文館　二〇〇五）
渡辺実『近代日本海外留学生史』上（講談社　一九七七）
石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫　一九九二）
松尾正人『維新政権』（吉川弘文館　一九九五）
石井研堂「新聞輯録の発行者」（『明治文化研究』三－八　一九二七）
小笠原長生「中根香亭先生を憶ふ」（一）（二）（『斯文』一四－八・九　一九三二）
桑原羊次郎「飯塚納」（『伝記』八－五　一九四一）
信太歌之助「維新当時囚獄に関する件」（『史談会速記録』二三八原書房　一九七四復刻）
石橋絢彦「沼津兵学校職員伝（三）阿部潜君伝」（『同方会誌』八立体社　一九七八復刻）
「本多晋」（同右、二七）
中村松太郎「中村六三郎略伝」（同右、五五）
小笠原長生「中根香亭先生の人物」（同右、五八）
丸山信「草創期の慶應義塾と長岡藩士」（『福沢手帖』二二　一九七九）
野村英一「古川正雄」（同右、四二　一九八四）
中金武彦「奥平壱岐覚書」（同右、七八　一九九三）
中金武彦「奥平壱岐から中金正衡へ－奥平壱岐覚書・その二－」（同右、八十　一九九四）
内海孝「ウォルシュ＝ホール商会」（『横浜開港資料館館報・開港のひろば』一六　一九八六）
西川武臣「ウォルシュ・ホール商会の番頭　松屋伊助と文書」（同右、二一　一九八七）
「御貸人」（『沼津市明治史料館通信』八　一九八七）
「天朝御雇」（同右、一六　一九八九）
「福井藩からの留学生」（同右、一八）
「海軍・海事関係の人びと」（同右、一九）
「故浅野美作守履歴」（『旧幕府』四－七　マツノ書店　二〇〇三復刻）
「戸川伊豆守小伝」（同右、五－一）
梅溪昇「駐英公使館付武官時代の黒岡帯刀－とくに海軍軍制調査と

その意見を中心として－」（同『日本近代化の諸相』思文閣出版　一九八四）
梅溪昇「黒岡帯刀の英国留学について」（同右）
大久保利謙「海舟麟太郎と蘭学－勝と蕃書調所の創設－」（『大久保利謙歴史著作集5　幕末維新の洋学』吉川弘文館　一九八六）
松尾正人「明治維新の政局と米沢藩政」（藤野保先生還暦記念会編『近世日本の政治と外交』雄山閣出版　一九九三）
辻達也「明治維新後の徳川宗家－徳川家達の境遇－」（『専修人文論集』六〇　一九九七）
高原泉「開成所版『万国公法』の刊行－万屋兵四郎と勝海舟をめぐって－」（『中央大学大学院研究年報』二九・法学研究科篇　二〇〇〇）
矢口祥有里「瀧村小太郎と岡田斧吉」（伊庭八郎研究会「秀穎会」研究誌『残照』四　二〇〇三）
矢口祥有里「岡田家のその後」（同右）
樋口雄彦「箱館戦争降伏人と静岡藩」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇九　二〇〇四）
樋口雄彦「旧幕府陸軍の解体と静岡藩沼津兵学校の成立」（同右、一二一　二〇〇五）
高木不二「黎明期の日本人留学生－日下部太郎をめぐって－」（『大妻女子大学紀要』文系三七　二〇〇五）

【展覧会図録】

『沼津兵学校』（沼津市明治史料館　一九八六）
『神に仕えたサムライたち－静岡移住旧幕臣とキリスト教－』（同右、一九九七）
『幕末の動乱と紀州』（和歌山市立博物館　一九八七）
『没後一〇〇年勝海舟展』（東京都江戸東京博物館　一九九九）
『常設展示図録　渋沢史料館』（渋沢史料館　二〇〇〇）
『幕末・維新の相模原～村の殿様・旗本藤澤次謙と村人たち～』（相模原市立博物館　二〇〇〇）
『幕末の市川』（市立市川歴史博物館　二〇〇三）